



大明小学校

## 校長室から

令和元年10月9日

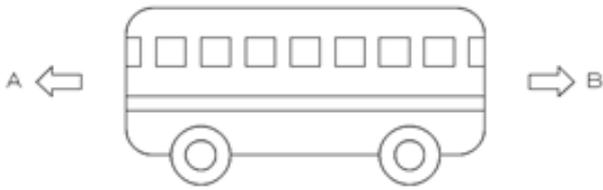
No. 32

文責 校長 飯久保一男

## 生きてはたらく知識

突然ですが、問題です。

下の図のバスは、このあと前進をします。  
A・Bのどちらに進むでしょうか？

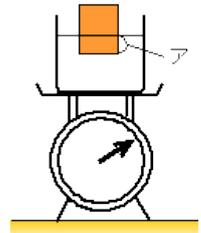


ご存知かもしれませんが、この問題は慶応義塾幼稚舎の「お受験」に出された有名な問題です。つまり、入学前の子どもが解く問題です。子どもなら、割とすんなり解ける問題だそうです。

しかし、大人はわからなかったり、時間がかかってしまったりする問題です。大人は知識がじゃまをしているか、あるいは考えてしまうようです。(答えは裏面に)

次の問題には正しく答えられますか。

- ① 500gの水に30gの木片を浮かべたら全体は何gになりますか？
- ② 500gの水に30gの食塩を溶かしたら全体は何gになりますか？
- ③ 500gの水に30gの金魚を泳がしたら全体は何gになりますか？



算数で重さの学習をしたばかりの3年生の子どもたちにこの問題を出すと、正答率はまずまずの結果になります。しかし、その後たくさんの方を学んだ6年生にこの問題を出す、3年生より正答率が悪くなるのです。6年生になるといろいろな知識を習得していますので、その知識が影響してしまうのです。

「木は浮くから、その分軽くなるんじゃないか」「木は水を吸うからなあ」

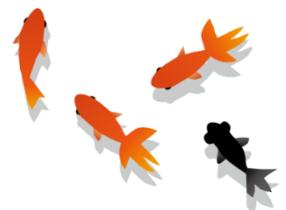
「塩は溶けるから、重さが変わるんじゃないか」「見えなくなるから重さはなくなる？」

「金魚は動くから、はかりの針が振れて重さが量れないかもしれないなあ」



など、余計なことを考えてしまい、返って間違えるのです。この問題の正解は、子どもたちの今後の授業に影響を与える心配がありますので、あえて書きませんが、ご想像の通りです。試しに、本校の6年生に協力してもらい、実際に上の問題に答えてもらいました。6年生の正答率です。

① 正答 39人	誤答 11人	正答率 78%
② 正答 23人	誤答 27人	正答率 46%
③ 正答 28人	誤答 22人	正答率 56%



思っていた以上に、6年生の子たちは、迷ったり困ったりしたようです…。

子どもよりも大人の方が、知識は多くあります。それがゆえに、大人は理屈で子どもたちを納得させようとする場合があります。しかし、その大人の知識も体験や経験に基づいていることも多いものです。大人も体験や経験を積んで知識を増やしてきたのですが、その結果として得た知識が先に出てしまい、理屈で子

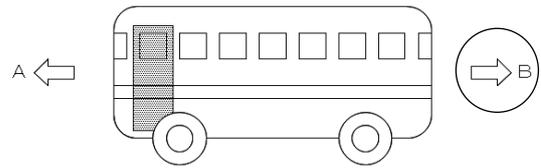
もと接してしまいがちです。ここでも知識が邪魔をするのはです。子どもに、より確かに、深い理解をさせようとするなら、体験や経験が必要なのです。前号でも書かせてもらいましたが、子どもたちが体験をし、経験をして身につけたものは確実な知識＝生きてはたらく知識となります。大人が教え込むのではなく、子どもたちが体験や経験を通して知識が得られることが最善の方法です。

知識は一つの道具といえます。いくらいい道具をもっていても、それをうまく使えなくては意味がありません。知識はテストのときだけに使うものではなく、学習を含む生活の中で、生きてはたらく知識となるようにさせてやるのが大人の役目です。子どもたちが体験したり、経験したりして、知識を習得し、その知識を活用していくもの、それが授業です。

慶応義塾幼稚舎の「お受験」問題 正解はBです。

もし、Aの方に進むのなら、右の図のように日本を走る（右ハンドル）バスならば、乗客が乗るための乗り口がなければなりません。それが見えませんので、このバスは前進するならばBに進むのです。

運転手が見えないから、ハンドルが見えないから…、などと考えた皆さん残念でした。ハズレです。



### 【全国PTA協議会「三行詩コンクール」優秀作品より】

文部科学省と日本PTA全国協議会との共催で毎年「三行詩コンクール」が行われています。優秀作品を紹介します。

ついにこの日が来た

息子のお下がり

俺が着る

(橋本 信二 宮城県)

「うるさいなあ」

娘に言われ、思いたす、同じセリフを言ったこと

親になり、親をおもう。

(朝野優美子 富山県)

七夕の夜 ふと見た短冊

覚えたての字で「ばばみたいなひとになりたい」

ずっと誇れる父で と星空に誓う

(橋本 勇希 札幌市)

帰るなり「給食おいしかった」と教えてくれる娘

その言葉でがんばれる

お母さんのライバルは学校給食

(川畑 香織 札幌市)

